

博士論文要旨

論文題目 H・ブルーマー集合行動論の社会学的研究 —流行理論を軸として—

なかがわ ひでき

仲川 秀樹

本論文は、アメリカの社会学者、H・ブルーマーが集合行動論の一つに位置づけた流行理論を社会学的に分析したものである。ブルーマーの集合行動論は、混乱した社会の秩序がどのように成立するか形成過程を理解する研究である。そこには人びとの社会的不安の状況から安定した社会へと移行する過程を、集合行動論研究に求めた理由があった。

ブルーマーは、集合行動の領域の一つに流行を掲げた。流行現象の根底にある人びとの社会的不安は集合的興奮を生み、衝動的な行動へと進む様子にもみられ、それは集合行動の原初的形態として明らかにされた。

本論文では、社会学者が研究対象として積極的ではなかった流行について、その必要性を論じたブルーマーの流行理論を取り上げ、分析し、流行が社会におよぼす今日的意味を探ることを目的とした。

ブルーマーの流行研究は、古典理論にある「階級分化論」に対し、「集合的選択理論」を提示して流行を垂直的なものから水平的に生成する様子を説明した。それは今日の流行が社会全体を巻き込んだ大規模なものから、それぞれの集団やエリアごとに発生する小規模な分化されたスタイルに変わってきたことを意味するものであった。

また本論文では、ブルーマー集合行動論の論点にある集合体（人びとの集まり）による、流行発生の要因を集合的嗜好、集合的選択に求め、その過程を明らかにした。さらに社会秩序と社会変動との関連について、ブルーマーの「流行の社会的制御機能」を用いながら、

流行の全体像に接近した。

そして、そこで浮上した集合的選択理論の重要性を再考するために、ブルーマーが批判を続けた流行の古典理論での服飾や装飾品にのみ限定されてきた社会学研究を再考する。その結果、ブルーマー社会学を継承したF・デーヴィスによる、あらたなファッション論として、ブルーマーの流行理論を再構築した理論研究の存在があった。そこでは、流行とファッションの関係を、歴史的過程である歴史的連続性から説明することで、集合的選択理論の有効性をあらためて導き出すことを可能にした。

結論として、ブルーマー集合行動論における流行理論研究は、社会の分散化した状況のなか、人びとの積極的主体性は消費行動を変え、大規模な集合体による流行から小規模な集合体によるファッドの出現によって社会構造が変化を遂げた様子に注目したものである。

本論文では、そこにある流行の生成過程を論じ、集合的選択理論は今日の流行の形態が変化する過程の分析に適応する理論であると考えた。そして、人びとの帰属にある流行の役割は、ファッドとして浸透した結果であることを提起して結びとした。

<論文の構成>

序章 H・ブルーマー社会学の源流

第1章 H・ブルーマー社会学の軌跡

第2章 H・ブルーマーの集合行動論

第3章 集合行動からみた流行の構造と機能

第4章 H・ブルーマーの流行理論

第5章 H・ブルーマーの集合的選択理論

第6章 H・ブルーマー流行理論の再考

第7章 H・ブルーマー集合行動論から流行理論、そしてファッション論へ

結び H・ブルーマーの提起した問題と残された問題